

東アジア地域の平和と発展に今、 なぜ国際理解が必要であるか

招聘研究員 沈 海 涛

【問題の提出】

去年の秋から今年の二月にかけて、計六回の県民講座及び研究会・勉強会で東北アジアの政治情勢、ことに日中関係の現状及び改善策について日本の住民、政府職員および大学の先生と学生との間で意見を交わす機会があった。

毎回、日中関係の現状を中心に、問題点及びその原因はどこにあるか、そしてどう対処すべきかについて、自分なりの整理と説明をした上、東アジア諸国の共生という視点から日中関係の現状及び将来に関して提言を行ってきた。

その際に、いちばん多く受けた質疑が二つあった。一つは、今、中国はどんな国となっているか。もう一つは、国際理解とだれでも言っているが、それが本当に一番重要なのか。特に中国の日本に対する姿勢にはあまりに見下したようなところがあるから、むしろ、中国こそ先に国際理解をなすべきではないだろうか、とのことである。

確かに、その意見は納得できる面がある。中国はここ二十数年来、对外开放と経済改革を断行し、国際社会に溶け込むステップもだんだん大きくなっていることは周知の通りである。また、経済の発展とともに、政治的な状況も少しずつ変わり始めている。アジア地域の大国としての自信も増える一方である。

しかし、中国は自分の国の現状と社会的進歩を世界に発信する努力があまりに見られない(少なくともアメリカ、日本のように、常に強く自国の「優れた所」をピーアールしよ

うとする姿勢と意欲が欠けている)。「竹のカーテン」が無くなった後も、「ガラス張りの板」がまだ敷いたままであるのではないか。その結果、中国の現状はどう変わって、どうなっているのか、見られたものは本物の中国の姿であろうか、と疑問視されても仕方がないだろう。

国際理解、国際協力を主張しても、その前提条件とする相手国に対する現状認識が不可欠なものだと考えなければならない。したがって、中国は勿論、東アジア地域の国々の状況、そして、その文化的社会的な状況が分からないと、真の国際理解はできないのは当然である。

したがって、本稿は、東アジアの平和と発展を考える際に、なぜ、国際理解が一番重要なのか、どう国際理解を促進すべきかについて、日中両国の実情および日中関係の現状を踏まえたうえ、検討してみたい。

【日中コミュニケーション・ギャップの現状とその要因】

日中国交回復から30年、日中両国の友好関係は着実に深まってきた。しかしながら、西北大学デモ事件を見れば分かるように、日中関係は多少のことではびくともしない強固なものでなく、ガラスの城のように非常にもろいものである。

また、日中両国の首脳交流が大きく停滞していることに象徴されるように、日中関係が一向に改善されていない。もちろん、日中関係がずっと冷え込んでいるのは、明らかにこ

の地域における各国間の交流と協力の拡大に相応しくないことは言うまでもない。

日中摩擦（日中関係の不安定）の要因は、中国の隆盛と日本経済の停滞による日中間にある新たな政治・経済の競合が一番だと、よく論者に指摘されている。しかし、「歴史認識」という感情的な問題をはじめ、日中両国民のコミュニケーション・ギャップ、台湾問題、領土問題、などの要素も見逃してはいけない。

中国共産党の機関紙『人民日報』の傘下にあるホームページ『人民ネット』が年月日から日にかけ、読者が選ぶ年日中関係ニュースベストを募集した。合計万千人の読者の投票による選出した結果を見れば、いくつかの特徴が見える。（注）

中国の全国人民代表大会常務委員長の訪日があったが、日本の首脳訪中はなかった。日中関係の重要性が再確認されたものの、日中関係の全体の状況には、友好的なムードがあまりにも見えないことである。日中友好平和条約の締結から二十五年間も経った今、今までの様子と比べれば、やや寂しい光景であった。もちろん、日韓友好交流年に盛んに行われたような充実した内容のある記念イベントと比べものにはならないともいわざるを得ない。

経済交流の緊密化が進む一方、日中関係にはマイナスのイメージが強く、日中両国民の相互感情を悪化させる記事が目立ったことが実情である。国と国との間に経済交流、文化交流を発展するには、友好的、安定的な政治関係が必要であることは言うまでもないけれども、今日の日中関係は経済と政治のバランスが保たれていないのは憂慮すべきものだとわざるを得ない。

互いに相手の国の文化、伝統及び社会的なことには無知、無理解な言動によって、相互不信を招き、双方の感情を著しく刺激させる結果となった。過去に何回も行われたアン

ケート調査結果からもその様態が見える。

具体的に、日中関係において次のように幾つかの問題点が指摘される。

第一に、日中両国の経済交流と協力（相互依存）の関係が増大するにつれて 認

も じている 日、日中 貳誌
その がいくつか に げられるほど、 勅 詣
い つは アジアにおける 全係

の には けの いが え
の および が

の から の に
したことを れば の は

の がだんだん に わっていく を
している また の の

の などの にも との が
まってい

また これらの の が
を しているほか な の からも

しい があがっている その を げ
れば の の と

お びのことである ビジネス
などのために に する は

であれば ビザは されること
になり からも の

にもかなり を れている
もう つ または を れた

のほとんどが するのは する
に どの を ぶのかということで

だんだん みの となってきた
の が され

ていたが になって に いてある
は となり に のもの

がもっとも つようになった で
の を っても と され

お にならない
しかし には い ばかりではな

い の につれて
も の から

に わりつつある したがって
においてお いに し する も

じ始めている。日中両国間の経済関係のみならず、東アジア地域でも日中両国がFTA交渉をめぐる思惑の交錯、アセアン諸国との経済協力関係における主導権の争いも、日中間に激しい掛け合いが展開されている。また、日本の海外進出企業の現地融合問題もしばしば話題になった。

第二に、日中両国の文化交流には新たな時代と流れが見え始めた。

今まで、日中両国の文化交流が両国の政府と民間の推進によって、両国の関係改善に大いに貢献してきた。

しかし、最近、いくつかの相互意識調査によると、お互いに好感度は落ちていく傾向が目立った。これも中国のナショナリズムの台頭と日本の歴史認識問題がしばしば指摘される格好の材料となった。

年の秋、『中国青年報』が行ったチチハル旧日本軍毒ガス事件に関する青年意識調査によると、事件によって %の人が日本に関する印象が悪くなったと答えた。

しかし に が の
ので しているのか な
と に に に にも に
する はそんなに くないとの が
からよく こえるのも で
あるのではないか

いままで の が に
または による な
イベント を して われてきた しかし
の の によって
が までにないスピードで ん
に んでいる な によって
のライフスタイルの にも く
を えるようになってきた それは のよう
な を ればその が かるだろう
を れたある が の につ
いて のような を した
は つのフロアからなる
の り から の だ

エスカレ タ では が ち ら な
い で と で んでいる ち み り
み どもにいたっては そべり みで
を いるように んでいる の
の りでは りをぐるりと むよう
に がしゃがんで を んでいる か
りを しているのだ

が で と いていたが
カ カ のカフカ は の
のごとく まで みだった に
は と されている が
に ったとき ち みを かけた は
を るときも じ で だった
ここで み るつもりなのだろうか

に においては
で となったのは であろう

に されるよう

に をめぐって には ま
た きな たりが している の
の と が に され

きな を けたアジア の を
せずに の または) の

のために な パフォ マンス
を し けている の の

イメ ジがダウンしたばかりでなく
をはじめ との

にもマイナスの を えている
また の を る

と カ の と が な となっ
ている アジア の と とい

う きな に って しなけれならな
い そのために の と

な が されている
に のコミュニケ ション ギャッ

プが に に されつつある
による が

することによって たちの
に け む が いのは その の

つとして されている また インタ ネット
において ナショナリズムの がよ

東 年

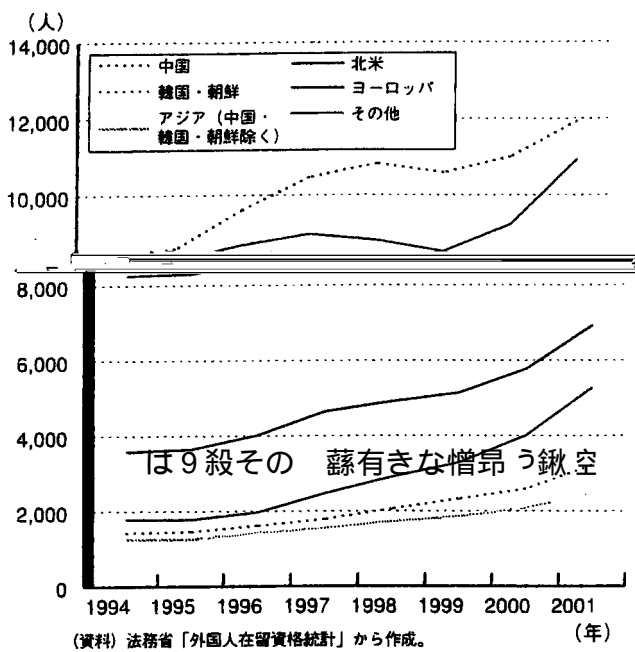


図 - 1 人文知識・国際業務の在留資格保有者数

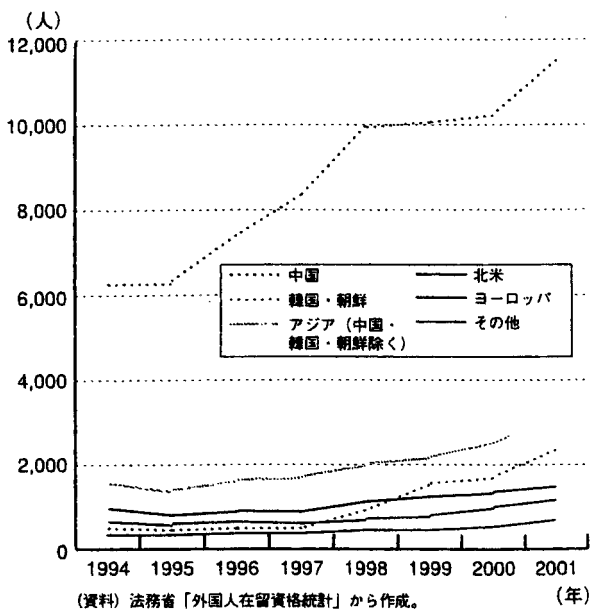


図 - 2 技術の在留資格保有者数

くじられているが、しかし、それにされるようなきなが、していることもしなければならぬのである。

な、または、を、とする、は、ち、の、と、な、をもつ、が、えている、の、には、が、となっ、ている、とのもう、つの、が、び、にも、きな、を、す、る、くの、の、

が、い、が、で、き、な、が、ら、の、を、つ、て、い、る、は、の、の、の、つ、で、あ、り、の、の、は、で、に、そ、の、が、い、の、と、し、て、の、が、し、て、い、る、と、さ、れ、の、は、の、の、に、と、つ、て、も、き、な、を、た、し、て、い、る、し、か、し、な、が、ら、は、そ、の、の、q、に、る、輩、衫、録、を、し、す、は、U、9、愧、の、の、で、が、4、井、冬、U、し、か、x、で、ノ、惹、dB、翠、な、な、る、苒、睫、鐘、

する必要があると思われる。(注6)

このように、いまの日中関係の現状は、日中両国の経済、政治の安定にとって積極的に推進するエネルギーを与えられないのみならず、東北アジア、ひいては東アジア地域全体の発展と平和にも影響を与えて、地域の不安定要因にも成りうるものである。

【国際理解を促進するための提言】

これまでに、日中関係の現状を打開するために、日中両国の専門家はいろいろな試案を提出した。ここで、いくつかの提案を紹介しよう。

「日中交流三原則」はその一つである。

「一、相互誤解の減少。二、理性的な関係の構築。三、共通利益・価値の創造に向けての地道な努力の必要性」というものである。

(注7)

もう一つは、中国の日本問題専門家馮昭奎氏が提出した「六つの日中関係の改善策」である。すなわち、当面の高まっていく日中両国の反日反中国のナショナリズムに注意すべきこと。日中両国の有識者、とくに実業界の有力者が文明と文化の対話と融合を図るべきこと。より多くの日中関係のパイプを作り上げるべきこと。経済問題の政治化を防ぐこと。歴史教育を改善し強化すべきこと。早急に日中間に緊急事態対応体制を作り上げること。(注8)

このほかに、最新の持論を展開しているのは、金熙徳、林治波、時殷弘、高井潔司の各氏である。(注9)

筆者の考えとして言えば、第一に、日中関係改善、国際理解を促進するために、相互認識及びそのための積極的な姿勢が必要である。

相互理解の前提条件はお互いの状況を知ることである。知ることに基づいてはじめて理解へと到達できるのは普通である。「その国を理解するには、その国民を統計的に、あるいは鳥瞰図的に見るということも必要だが、

一番の近道は友だちを作ることだ」。(注10)

しかし、西安市で発生した日本人留学生による「下品な寸劇」と中国人学生による在留日本人に対する焼き討ち事件からは、その姿勢が見えてこない。相手の国の伝統、文化、社会的状況をあまりに知らなくて、先入観に基づいて自分の考え方に相手から同調してもらうのは当然不可能であり、反発を受けたのもやむを得ないことであろう。一方、過激な反応により相手の行動を拒否し、相互の違いを認識し、お互いに理解と和解を求めようもしない姿勢は、開放的、民主的な現代社会に相応しくないものとしが言えないだろう。

天児氏が曰く、「日本留学生が自ら参加したのではなく半強制的に参加させられた」。このことは逆に言えば、日本人留学生は積極的に留学先の現地の社会、文化に参加していないことも物語っているのではないか。(注11)

2004年の元旦、小泉純一郎首相は新年早々総理大臣に就任以来四回目の靖国神社参拝をした。その後、記者の質問に対して、小泉首相は関係諸国はそれ(靖国神社参拝)に対して「理解してくれる」と答えた。

しかし、小泉首相の「理解」発言に対して、どう理解すればよいだろうか。自己中心的で、「日本の平和と安全」を強調するだけで、過去の日本の侵略戦争による被害を受けたアジア諸国のことを配慮しなかったことは、こんなに国際感覚の欠如している一国の首脳の行動が「国際理解」になるかに疑問視せざるを得ない。

また、2001年の秋、小泉首相が日帰りで中国訪問をした際、北京郊外にある盧溝橋「中国人民抗日戦争記念館」を訪れ、そこで「忠恕」という字を書いたことがとても印象深い一幕であった。(注12)

「忠恕」とは、かつて中国古代の孔子の『論語』にあった言葉である。日本の辞書では「真心と思いやり」という解釈が記されている。小泉首相が日中友好の発展に尽くした

い気持ちでその字を書いたそうだ。しかし、その言葉は中国人の立場から見れば多少の違和感を覚えざるを得ない表現である。

というのは、同じ漢字なので、「忠恕」は中国語にある同様の漢字の意味合いに解釈されるに違いない。しかし、そこに問題が出てくる。同じ漢字であっても、日本語と中国語との意味がすべて同じだとは限らないのである。「忠恕」は現代中国語であまり使われていない言葉であり、普段は「忠」と「恕」が別々に使われるので、それほどの曖昧さを感じ取られない。一般的に、「忠」はある人あるいは組織に対する忠誠心（それに対する評価も含む）を表現する際に使うのと対照的に、「恕」は他人のこと（とくに誤りなどの否定的なこと）を思いやる心情を表すものであり、目下の人を対象として使う場合がほとんどである。

だから、日本語での「忠恕」という言葉を、そのまま漢字で漢字の国で使うのは、本来の意味が別の形で解釈される恐れがあり、誤解されやすいことは否定できない。特に日本の侵略に抵抗した志士たちが記念されている『抗日記念館』においてこのような誤解されやすい言葉を書くのは、小泉首相の真意が疑われても仕方のないものであろう。

同じ「理解」という言葉を使うが、その使い方によって意味が大分違ってくる。特に、理解することは、一方的な発想からのものではなく、お互いに理解し合った上で成り立つものだから、一方的に相手に対して「理解」を求め、自分の考え方や行動を相手に押し付けるのは、あまりにも自己中心であり、真の理解が貰えないはずである。

政治家また政府の指導者の立場にある人は、外交問題に係る事案に関して大局高所から考慮しなければならない。自国の国家利益、政治情勢そして外交政策の整合性を考えると同時に、関係諸国への配慮も払わなければいけない。日本政府は小泉首相の靖国神社参拝を

受け、国立戦没者記念施設の建設検討を中止することは、長期にわたり日本の外交にマイナスの影響を及ぼすだろう。

勿論、理性的に相互の相違を認識し、相手の立場にも配慮して物事を考えようとする動きもないわけでもない。一昨年からの「外交新思考」をめぐる論争は、日中間の有識者はもちろん、一般の人々も加えた日中関係の現状と将来に関する議論であり、日中両国の相互認識と相互理解を大いに促進したに違いない。

第二に、対話と交流によって誤解を無くし、日中両国のコミュニケーション・ギャップの解消ができる。

そのために、日中両国は経済交流、文化交流などの共通のテーマを通して共通の利益・価値観を求めなければならない。これまで、筆者は日中両国政府が日中関係を中心に、東アジアという大きな枠組みの中で政治、安全そして経済協力などに関して対話と協力を強化すべきと提言していた。

もっとも大事なものは、日中両国とも大局・高所から日中関係を、単なる二カ国関係のみと捉えず、東アジア地域の同士としての自覚を持って、共に日中両国ないし東アジア地域が直面している政治、経済各分野の問題を考え、相互理解と協力によって共に生きていくことである。

その理由は、簡単に説明できる。すなわち、東アジアの平和と発展には日中両国の役割が重要である。「相互依存理論」によると、アクターが増加することによる協調志向の醸成と、紛争回避の作用が生じることになる。東アジア各国の相互依存関係が強くなりつつある今、日中間の相互理解がなければ協力して東アジア共同体を作るのは無理な話である。

したがって、日中両国ともに挑戦に臨んでいるから、相互の理解・協力が必要となるのは当然である。大きく言えば、新しいアジア時代を構築するには、日中の相互理解と協力

が重要である。日中関係の改善は両国のみならず、東アジア地域、ひいては世界の平和と安定にも大いに貢献できるに違いない。

第三に、お互いに尊重し合って、変化（発展）の目で、激動の時代に相応しい判断をなすべきである。

二十世紀以来、世界が大きく変わりつつある。中国が社会主義を堅持しながら市場経済体制を導入し、新しい国づくりに全力挙げている。中国の経済発展と政治的な安定は東アジアだけでなく、地球全体の平和と繁栄にも貢献している。当然、日本も変わりつつある。いままで日本は高度の経済力と平和主義的政治、外交が世界の経済発展、特に発展途上国の経済発展、そして地域の安定に対して果たした役割が高く評価されてきた。

いま、日中関係は従来の友好関係から普通の二か国関係への移行期にあると言われている。したがって、より安定した相互関係を構築するためには、相互に理解することが肝要である。相手を認識し、理解することは、自らを再認識する過程でもある。お互いに違いを認識した上で、自らの文化・社会・思想・制度のあり方を知ることができる。意見の相違よりも、素直かつ誠実に話すことが相互理解を促進できる。

「大切なことは、まず、「認識のギャップ」があることを「認識」すること。お互いに、違う価値観を持つ社会に生きているのだということをもまずは理解することが最低限必要だ。」（注13）

したがって、当面の日中関係の難局を打開するには、相互認識・相互理解の良い循環、すなわち、現状認知 相手認識（知る） 相互理解 共存共栄（協調・競争）を作ることが緊急課題となってきたのではないか。そうでなければ、日中間の似ても違っている点（社会、文化、思想体制、国家利益などの相違）を無視し、相手について知ろうとせず、分かっているつもりで行動することは、結果

的に誤解を招き、双方の感情的な対応と言動が世論を通して発散され、さらに政策立案者の誤る判断を引き出し、日中関係に悪い影響を与えるに違いない。平穏でない両国関係によって、さらに多くの誤解、対立、世論の悪化、などの悪い循環（サイクル）を生じることが、日中両国にとって不幸なことであり、東アジア地域、さらに世界の平和と繁栄に対しても不安定の要因になるに違いない。

【結 び】

確かに、今後の日中関係は「協力と共存」、「競合と摩擦」との二つの側面の交織する中で進むことであろう。（注14）

二十一世紀はグローバルの時代だと言われている。日中関係および東北アジア地域の平和と発展になにが最優先課題であるかを考える際、グローバル時代にふさわしい視点と行動が必要となる。狭い視野で自国の国益だけを考えるのは時代遅れになるばかりか、地域全体の平和と発展にもマイナスの影響をもたらすに違いない。日中両国民の相互理解と協力があることこそ、東アジア地域の平和と発展に貢献できる第一歩であると信じる。

これまでに経済協力を含め、日中双方の努力により日本と中国の友好関係が深まってきた。しかし、新しい時代に相応しい対応が求められている日中両国にとって、何よりも相互の意思疎通、相互理解の重要性を認識し、それによって積極的な行動が要求されている。

東アジア地域の共生という視点から見ても、日中関係の現状を改善するには、「草の根交流」を含め、もう一度真剣により多く隣の国のことを知り、相互の考え方や行動を理解し、身近な努力により相互理解を深めることを再認識する必要があるのではないか。

（中国・吉林大学東北亜研究院 助教授）

注1：『人民ネット』（<http://japan.people.com.cn/Zhuanti/10/10.html>）2004年1月9日。

『日本僑報』(

)第 号 年 月 日。

注 : 『通商白書』、經濟産業省編、平成 年、第 一。

注 : 『中国青年報』(

)

注 : 吉田 「北京 書店」『

出本本 周辺』、今井書店、 年 第 号、第 一。

注 : 同注、第 一。 図表 : 日本 外国人在留資格表 (人文知識・国際 業務 ; 技術) 中国人 割合 多 分 (筆者注 中国人 場合、留学、 研修、 主要形)。

注 : 蒋立峰編 『日中両国 相互認識』、世 界知識出版社、 年 月、第、 一。

注 : 天兒慧 「対日感情悪化問題 再考」 『東亜』、霞山会、 年 月号。第 ~ 一。

注 : 馮昭奎 「六 日中關係 改善策」 『東方時報』 年 月 日。

注 : 金熙徳・林治波著 『日中「新思考」 何』、日本僑報社、 年。時殷弘著、 中国通信社訳 『中日關係 対 戰略的新 思考』(同上)。高井潔司著 『「対日新思考」 論議 批判的検討 新 対話 枠組 求』(同上)。

注 : 片山善博、劍持 ; 肩旋磐 也志 手駿尊 奈插 ' 麥俞。 又粉鐸 音兒 共 獐 袋 囊馮 fi 仓 蜊井立

第 号 嗣 广 慨 慨 憲 憲 憲 癩 錫 铈 駟 次 鞍 ° 必 屯 皇 鉤 井 へ 俞 嗣 圭 文 广 慨 慨 錯 粒 ° 憲 泉 惡 鏐 考 よ 注 關 霏 末 二 や”